

解説

保育者の専門性と研修のあり方

少子化、共働き家庭の増加等に伴う保護者のニーズの多様化、特別な支援が必要な子どもの増加など、園を取り巻く環境が変化する中で、保育者にはこれまで以上に、専門性を高めることが求められています。しかし、保育者の専門性の中身を言葉にするのは、意外と難しいのではないのでしょうか。そもそも保育者とはどのような仕事なのか、保育者ならではの専門性とはどのようなものか、そして、その専門性はどのように維持し、高めていくことができるのか。「保育者の専門性」について改めて整理していきましょう。

記事監修 神戸大学大学院 教授 ^{きたのさちこ}北野幸子先生



保育者の専門性は「知識と技術」「実践力」



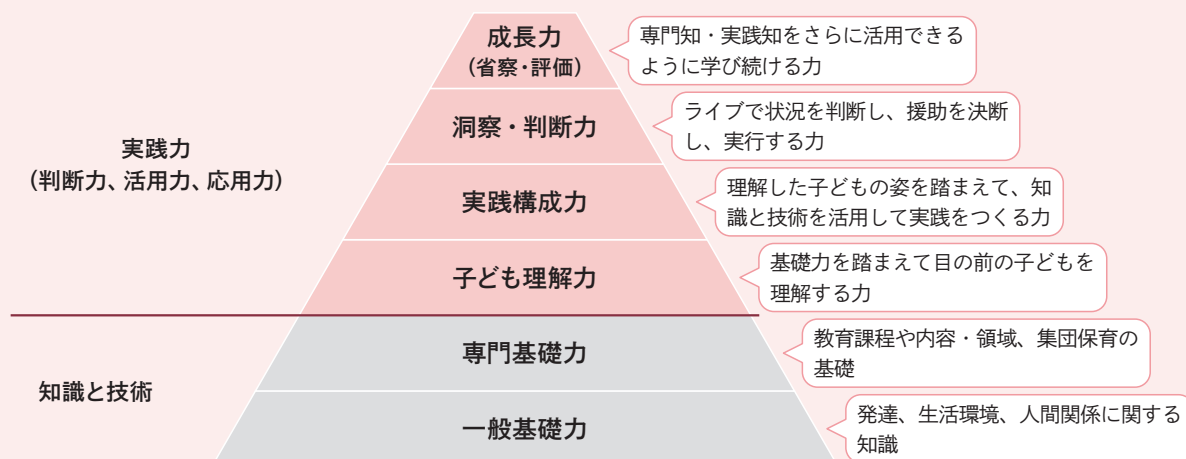
子どもを洞察するためには さまざまな力が求められる

保育の質の向上を図るためには、保育者自身が保育の独自性と保育者の専門性について自覚することが大切です。小学校以降の学校教育とは異なる保育ならではの独自性は、1つは、「子どもから」という考え方を徹底し、個々の子どもの主体性を最大限尊重することです。そして、もう1つは、生活や遊びの文脈の中で自然に学びを培うこと、つまり、目的志向型や結果主義ではなく、プロセスを大切にされた教育であることです。この2つが保育の独自性として重要であることは、保育者の先生方も日々実感されていることと思います。

子どもの主体性を尊重し、生活や遊びの中での育ちや学びのプロセスを支援するため、保育者には子どもの興味・関心を理解する力、子どもの発達の特徴を見取る力、子どもの育ちと学びを見通す力が求められます。個々の子どもを洞察し、理解の深化を図り、その育ちと学びを支えるのが、保育者の専門性です。

保育者の専門性は下の図のように整理できます(図1)。保育を支える土台として、一般基礎力と専門基礎力があります。一般基礎力は子どもの発達の特徴や、生活環境、人間関係の特徴などに関する知識や技術のこと、専門基礎力は要領・指針*、保育の5領域、集団保育の基礎などに関する知識や技術のことです。そうした知識や技術を土台と

図1 保育者の専門性



*北野先生の提供資料をもとに編集部で作成。

*幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。

した実践力とは、一般基礎力を活用して子どもを理解し、専門基礎力を活用して実践を具体的に構成し、ライブで判断し、決断していくことです。そして、自らの保育を振り返り、手応えのあった実践の特徴を把握し、自身の力として身につけたり、改善を図ったりして、成長へとつなげます。

保育者は、弁護士、医師、看護師、社会福祉士

などと同様に、人を対象にした、実践・臨床を伴う専門職です。対象が人、それも子どもであるため、個別性が強く、相互偶発性など不確定要素も少なくありません。ライブで展開する保育は、即決で判断を下さなければならないことの連続です。だからこそ、実践した自身の保育を常に振り返り、自らを高めていくことがとても重要です。



経験を言語化し、保育者同士で実践力を高める



子どもの事実を出発点に 自身の保育を振り返る

保育には「こうすれば必ずうまくいく」という決まったセオリーは存在しません。個々の子どもが異なり、常に変化しているからです。よって、ベテランの経験に頼るのではなく、若手・ベテランを問わず相互に語り合い、学び合う双方向的な研修が必要になります。

双方向的な研修として有効なのが、他者への「公開保育」です。公開保育では同じ保育場面を見て、実践を基盤に保育を語り合う機会が得られます。ここでは、実践力の向上に役立つ振り返りが、1人ではなくほかの保育者との協働で深められます。

実施のしやすさでは「事例やドキュメンテーションを検討する研修」も、擬似的な公開保育として有効です。ドキュメンテーションは保護者の子ども理解を促す媒体として活用されますが、保育者がほかの保育者の実践から学んだり、互いに相談し合ったりするための媒体としても役立ちます。

多忙で園内研修の時間が確保しにくい場合は、「短時間の対話型研修」を行う方法もあります。1人3分以内で、その日園で実際にあった出来事に基づいて自身の保育を振り返ります。1回の研修の参加者を最大5人とすれば合計で15分、全員が話した後に自由に感想や気づきを10分程度語り合っても、30分もかかりません。「今日うれしかった出来事」「今日最も激しかったいざこざ」など、保育を振り返るテーマを決めてもよいでしょう。

いずれの研修でも、保育を振り返る際には事実を出発点として語ることが大切です（図2）。振り返りの根拠を示すことで対話が深まります。さらに、その解釈を踏まえて、どのような環境の再構成や支援の工夫を行ったのかを保育者同士で言語化し、共有することで、子ども理解を踏まえた実践のあり方への認識が高まり、実践力の向上につながります。そして、対話を通して保育者同士が「もし私なら、このようなとき、こうするかも。なぜならば……」と、子ども理解に基づく実践のさまざまなあり方について語り合う中で、互いに選択肢を増やしていくことが期待できます。

保育者の仕事はマニュアル化が困難です。ライブで展開する保育においてとっさの判断の礎を築くために、自分やほかの保育者の保育を振り返り、語り合い、「なぜそうしたのか」「別の選択肢があるとしたら」と考える。そうすることで、保育者の専門性が高まっていくのです。

図2 保育を振り返るプロセス

①「子どもの事実」

子どもの会話、行動、表情などの事実を言語化する



②「保育者の解釈」

子どもの事実から見取った育ちや学びの評価を言語化する



③「解釈に至った理由」

子どもの育ちや学びにつながったと考えられる環境構成や保育者の援助などを言語化する

*北野先生の提供資料をもとに編集部で作成。